

生活 Wide かに

ボランティアと協力する博物館が増えている理由について、日本博物館協会専務理事の田村誠さんは「館側の予算、人員面での厳しい事情がある」とみる。

# 収集より講座など重視

# 博物館企画 住民が参加

生活 Wide かに

地元の博物館と連携し、企画や運営に参加する住民が増えている。テーマも歴史、子育てなど多岐にわたり、博物館が住民の地域おこしの拠点となっている。3日は文化の日。地域の文化について考えたい。(前田利親)

地元の歴史愛好家ら60人で作る市民団体「幕末長州科学技術史研究会」が、大砲を所蔵するイギリスの博物館に働きかけ、展示を実現させた。現在、大砲はイギリスへ返

## 地域おこしの拠点に



「下宅部遺跡はっけんのもりを育てる会」では、博物館と協力して土器作りの教室を開くなどの活動を続ける。「地域への愛着も高まった」と伊藤さん(右)。(東京都東村山市)

昨年の同協会の調査では、半数の館が「予算が減少している」と答えており、1館あたりの常勤職員の数も減っていた。その分、ボランティアの助力が欠かせなくなっている。

また、予算減などで、以前のような収蔵品の収集や企画展示ができなくなり、講座や観覧会など地域での教育普及を重視する館も増えている。

ある博物館関係者は「人や予算が限られる中、館の生き残りのために、地域住民との交流に力を注ぐしかない」と漏らす。

博物館の事業などを支援する「まち研究所」代表、重盛

## 人員、予算減が影響



重盛 恭一さん

恭一さん(47)は、この現状を好機ととらえる。「地域での教育普及の重視は、世界的な流れで、日本は欧米に遅れていた。住民にとっては、博物館に親しみやすくなり、文化を楽しむチャンス」と話す。

博物館と連携する住民団体に、支援を行う企業も現れている。花王(東京)は2007年から「コミュニティミュージアム・プログラム」という助成事業を行っている。助成金の上限は1年間につ

して受け入れる博物館は増加している。

日本博物館協会(東京)が昨年、全国の2257の博物館や美術館などを対象に行った調査によると、34・5%の館がボランティアを受け入れており、1997年の13・9%の2・5倍になっていた。



金山喜昭 法政大教授

活動内容も入館者の案内や企画の運営など多岐にわたる。法政大学キャリアデザイン学部教授、金山喜昭さん(54)は「(博物館学)はここ数年で博物館とボランティアの関係が大きく変化した」と話す。以前は館が用意した仕事をこなす「官製ボランティア」が大勢だった。

だが、住民の意識が高まり、「単に下請け作業をするのではなく、自分たちの理想を持って、館と連携する住民が増えた」という。

博物館とボランティアが協力して公園づくりに携わった例もある。

東京都東村山市では、縄文時代の遺跡を公園として保存するため「東村山ふるさと歴史館」の学芸員と地域住民が検討会を開き、公園のデザインを話し合った。

土器の野焼きができる場所を作るなど、住民の様々なアイデアが公園の設計に盛り込まれ、「下宅部遺跡はっけんのもり」は2004年に開園した。

住民ら40人は今も公園の掃除や管理をし、土器づくりの教室などを博物館と協力して開催している。「下宅部遺跡はっけんのもりを育てる会」代表の伊藤友己さん(57)は「博物館と、対等な仲間として活動してきた実感がある」と話す。

金山さんは「博物館や美術館は、地域の文化や街づくりの拠点になりうる。そのためにも、広い層の住民の参加が必要だ」と話す。